



諸國里人談卷五





諸國里人談卷之五

九氣 秋部

- 大生人 和泉
- 伯藏主 江戸
- 宗語狐 京
- 鯉社仕者 丹波
- 大蟹 信濃
- 大蟹 栴津
- 松喰虫 武蔵

- 源五郎狐 大和
- 横山狐 伯耆
- 箱荷仕者 京
- 黒島鼠 讃岐
- 武文蟹 栴津
- 大馬賊 桐模
- 石鈴 土佐



乃復みかの天来ていしく念仏の功ありんく
人間も生れ門敷人の妻めやるとしほりて男子
を産り和尙志りく乃半紙を執小再して六七歳
の頃より出家させたり聰明敏智ありて一と學を
すと慧るらんくふようふ大印め長育してたりは者
知少より餅をまきひて食せたりきる前生の天より
きり半紙ふりぬく新糸意の中をて仇名を白
木よりひきちるをいやんくは思ひて十三歳の時和尙
問我を白鬼といふ事何也くをゆめやんは事

とありぬらきと云くこの餅をまきぬ思ふ出
そたりふまりあうふ餅を食くゆめは秘あり
すし記やいふをしそれ事なるくすし食くむと
餅の日猶もむしきるり用ある種を座を去り
て行方あるなりぬそれ事未むきとてあ
志身さりきし和尙よりさき事といひつるもの如
と其後悔してきり
常子重智み札の上め一首を誦せり
何とて身の上を白をれとて思ふはぬいふを思

源五良狐 小女郎狐

延宝の頃大和國宇多郡源五郎狐といふ所り帯に
百姓乃家小雇ひきて農業をこころふ六六のとき
勤むといふ民家はをこころひて振さる何れり
来りてきて一をこころひて或時関東の飛所
みね北行道十餘日の不もい性来七八日也何れ
よりそれり夜く性来一けり小夜中山を
大のふあ死せり首ふもろろ文箱をこころ北不よ
と大和へ宿もろろふりては事とをきり又曰

あり伊賀國上野の廣禪寺といふ曹洞宗の寺
小女郎狐といふあり源五郎狐が妻なるより性
を好くこころひて常々十二三をりりのお女の兒女
こころ庫裏めあつて世事とて手傳ひ或時と
性業を求め川前め来る所の者すは小女郎
来といふもえりあて益才め豆腐をよとて又
小女郎といふありてこころひてとえやけり
めめりむいし完全あつてよりあはからあつり
四五十年経て其後行方たれ

伯藏主

江戸小石川傳通院正念覺山上人京都より下向乃
節道づきの僧あり名を伯藏と云り別傳通院
の會下所属して学文其毎度法問其剛目より其の
語を知りて一交もあつれをいふ所ありて者も
あつれし其傍希有み出ひける一曰熟睡し其の性
をいふを是を痴と云ふやそれより遂天と云ふ
の於て其の内もあつれ其毎み不化察み他回し
外面より法と論より其伯藏の著述の書物

一栴檀より今ふありと其其源を人にも貸し移させ
るしけり今及れハ誠の文字ありんとい宝永のころ
迄存命ありし今伯藏主稱荷と稱して其其
元末此栴檀下銘圖飯沼ありしとい弘教寺に
て其其も和好しき事あり

○岡山上人其の声ハ学文の坊なりと封せしなり山の聲
あり

○横山栴檀

伯耆國大山山横山栴檀あり是則明神の仕者之

諸より我皇此狐を禊と祈ふ成就せむといふ事
あり盗人子あつるもの此狐を禊と祈まゝ即ち出く通
き入くそのかの盗り家あつて事妙あり○大山六智
明神に祭神大己貴命神領三千石坊舎四十二院あり
叡山の砂盆に下り夜八升と云り

○宗語狐

京都八村路通に芭蕉山人秀才の俳士之常小福荷
と信し毎月深草の社あ詣りり茲に八旬の僧
乃是を折し泰詣りり面を合む事とびりて

或時奥院(光)アモ多ふの僧あ合りり臨通(と)當
社あわろそ老僧とそ尼多事数あり定く此所神事依
仰の人老しそあゝ免と訪ひりるあまゝ孫もたみそ
と張り合ふも教生三山の事とそ委く教つらまけり
そ北より親くなりて臨通庵に訪ひりる
終に其位不たかといり名に宗語とす一臨通院に
ハ記録者そ古代の事とそ委く一宗語老人の事と
向ふも五百年末の事とそ委く一七百年
の事とそ女あまいりりるあまゝ事とありとそや是あ

と路通記禄の事と云ふり 睦し今あり三と勢を
經く于時宗徳のつとく 吾國東に記く事有り年
末の餘波より明日勢多のふりてを別をせし留心
へし其不しくよみ待合を命ずと約しぬ明の日紙
乃刻浪よりまや路通ハ勢多のふりて茶店に在
りて命を命ず茶店より一人の徳士是れ人と云はれ
なりしを云ふり宗徳老人旅に云はれ是れ其の右
より西徳士出むしいと云ふりて其の徳士は云ふ
事一問ありて餘波の圖を及びけり時宗徳のつとく

年来其士此親しく其れごとく此度 國東に記
く老衰く其れと西京のけとを云ふりて今由て
はよみゆきとも早徳を命ずしめあり其 吾元來人
間ぬ何れに執りて年次船の仕者目とつと是れ今
年仕にし禱しとて我古く江別産根馬淵何某と
名に及ぬし奴等とて我事とてとて云ふりて
物よりして立別斗りあり其士は只あきれり云ふり
りて云ふりて云葉もさうりき而後其士は記あり
西一人の徳士も路通の志をひよとてたぐりて

かゝる女士をくふ彦根を立城て今此の事を志せ
あり其孫子をも聞了と云はれりきく彦根不
記き奴馬刺と田地あり持する百姓よりきく彼
あり系於宗格元僧の云葉ありて後承り
彦根を此亭主則是を公むし居士衣の袖と
と向て一間お詰し元僧より乃使とあるはさ
て奉属をとおし中をんと大を改免せむらふ
もなきしら女士をこれきやりのゆにあるは系
於此の志しは惣か子のありとゆらきくかきふ二大

きめ是とせしむる四と勢ひあ上京ありし其後
安否を志すはふくくくの便りも聞つもの
ゆしよりひありし言度ふんをいしむ干
時主とて曰一子十二家の時より行をりこれ
後志すは親族よりしり尋ね事をも承り得す
父母は出歎しきり志すふ百五十りを建し
しを海人、勢子し事をいり宗格元僧を誘引
て夢く誘國の神社佛圖名所四跡をえり
より別を信ありし相いりしむる終へるとあり

乃を信竹笠を物々行うしを請じ入るる
老僧もむして云いける此の我子と迷ひ給ふ答へ
昔と人間もあはれき塚地の船荷の社も恒む極へ
昔年京都奉山の仕者司乃番もあはれり旧地を
もるれの名残且六教百年又住石の恩を謝ん
ぐあ今一子を侍ひ國をもをるを此餘か文と字
を也等師を教申近く上京られ二生乃別きなり
其方一族誰れ男女も余未だ何日の夜答を
へし善道き此田のあま集むて一そ此時地内の社

乃前もあはれしきん其老母つひくあへしと約し
去りぬいぬくも其初を物不件のあるし是れ
ハ教ふし十所あまりも行なりとあはれ寺も
ひしき菴室ありかの老僧出むし約不違此く
そあはれしと斜るし各産舗も請りし
其あはれも千人料理執立の事ありをほとあは
膳もあはれし給仕の小姓もあはれしと次は美食教
を所なり昔魚物もあはれを答を心もあはれし
あはれしとゆりやあはれしとあはれしと于時王

同て云老僧を凡人もねハ神通を云塩増を辨
つ所少半自由をん他を貧り探めて此美食を
あを不杖乃事かしそあき管々云全く人の物とし
探るああハ吾も金銀の物多ありと云其金銀
を又妙術を以てるべしあもつしヤさぬるる
其根を解らんハ教ひを此す一昔券属一千金有り
かまし市中小出く賣茶以その餘利分これ
此傍をい海を今宵の茶果其外の惣物也の價
を以てのうり元り是我もあつて益を以て

送へるとい深更よ及んくまじい此前のことく大の光
を先かき社の前かゆりうり二三日をく右の惣
物あのうちふ社乃前か換並うりまるとり此通
の世社その利をしそ此伝ふあつて伝る

○稻荷仕者

宗諸を俗路通よ詮く弘法大師入唐の時一人の
老翁形中かあり海路の内中旅の地此或諸候乃
按出家の分際要くく唐に入益地身く
明日の業を今日より告急くく先か乳の副が

空海ハ徳宗皇帝ヲ謁シ且惠果和尚ヲ覲テ西都
乃秘奥ニ附シ三年少シテ返朝ノ御座申之其カ
老翁ヲ教ヘ曰翁老凡人ニシテ定テ佛法難
護ノ神ナリ也一海ニシテ其時ノ翁ヨリ我ハ飯生ノ
神ノ仕考芝守長者ノ地ニ住ル狐ニ茲ニ其カ
ヒアリ大徳内朝ニシテ其カニシテ其カニシテ
伽藍造立ニシテ飯生ノ神ニシテ其カニシテ
一云子細アリシト能事アリキハ一ノ東寺ニ
建立其寺成テ秋ノ夕空海羅生門ニテ四方ニ

免其ノ下ニシテ其カニシテ其カニシテ其カニシテ
隨此ノ其カニシテ其カニシテ其カニシテ其カニシテ
飯生神ニシテ東寺ノ鎮守ニシテ其カニシテ其カニシテ
其カニシテ其カニシテ其カニシテ其カニシテ其カニシテ
今其カニシテ其カニシテ其カニシテ其カニシテ其カニシテ
其カニシテ其カニシテ其カニシテ其カニシテ其カニシテ

一書曰大師ニシテ其カニシテ其カニシテ其カニシテ
其カニシテ其カニシテ其カニシテ其カニシテ其カニシテ
空海ハ宝亀五年ニシテ其カニシテ其カニシテ其カニシテ

○又飯生山といふ六思み飯を生くやの山ニツ有
依る飯生三山と稱すといふ

○鯉社仕者

丹波國兼河村鯉大明神の仕者ハ鯉ハ土俗云ハ鯉ニ
秋毎日大極川をさぐりて松尾明神ハ仕者少通ふ
といふハ鯉大明神ハ産子鯉といふハ立所口中
腫痛夏才夏ハ情の者多類と喰ひ食はぬ者
麻をくぬの類ひるなり

○黒嶋鯉

伊予國矢野保の内黒嶋といふ一里をり鯉ハ古
あそかの所也あつてをなぬの大ニといふ細人魚を引ん
とくといふありきけふ魚のあそふ老いしてをゆり相なる
ク破ちりくわわいといふ老いありまらこい細いお
ろくけりお魚もあそく若干の鯉を引あけり
岳おあそハ魚ハちりくといふせうりそれなり時
も魚も有る細いのをし喰ひて今も
耕作も有りなり 著作見

○大籠

信濃國上田の冬(冬)或寺に猫あり近隣の猫をよ
喰(喰)れりて世ありし福にまじりしとよ流(流)之寺
ありて近放(近放)せしむり日(日)田舎(田舎)り野(野)実(実)を商
士民ありし猫をよて世をよかぬ逸物(逸物)とあるもの
多しと云ふもよはのびりり位(位)傍(傍)の云(云)毛(毛)をよるを
よと云ふは男(男)大(大)根(根)やりの物(物)を以(以)禱(禱)しよれふりて
年月(年月)の難(難)と通(通)きりりしよ其(其)謂(謂)ふに我(我)はよ
悪(悪)氣(氣)ひよありし米(米)穀(穀)をよあし悪(悪)物(物)と扱(扱)ふ事

年あり是(是)ハ何(何)もゆるれし八旬(八旬)もあや老(老)母(母)ありぬ
毎(毎)此(此)髪(髪)をよむる夜(夜)をよ通(通)り切(切)り盡(盡)す他(他)行(行)
乃(乃)時(時)と近(近)隣(隣)に氣(氣)はよぬしよ謀(謀)まよを
よ得(得)たりありし猫(猫)をよ来(来)ぬ今(今)もよ能(能)くつる猫(猫)をよ
喰(喰)教(教)をよ教(教)ありまのよ女(女)院(院)の猫(猫)も今(今)もよれハ余(余)も
志(志)をよしためしりるが如(如)例(例)氣(氣)をよ猫(猫)別(別)氣(氣)をよ
喰(喰)し福(福)をよし猫(猫)をよしして其(其)數(數)共(共)死(死)しりよとよ此
所(所)をよ氣(氣)宿(宿)しよその猫(猫)氣(氣)の採(採)あり言(言)し屋(屋)代(代)の問(問)之

○武文解虫

嶋村蟹 平家蟹

横津園尼ヶ崎兵庫の浦に蟹の甲怒まる畜のおとく
みしを甲成るるありさぬは是泰の武文杉浦太郎
く為し海中より死にその靈有り云り式島村蟹云
○又長門國赤間關の色おくはれどく乃解出あり
是ハ元暦二年少平家の二門戦ひ負て多く入水
りも此靈有り云り云りけしよてハ平家蟹と云り
あ説もみあやし説有り

○大蟹

三河國幡豆郡吉良庄宮吉新田の海邊ハ大塘
みしを根通りハ石を以築立高さ一丈二三尺余小山の
おとくるるが享保七寅八月十四日の大嵐を以掘切
里人多く出く其身を防くハ甲の厚し七尺有り乃
蟹出たり水門の傍を穿て栖しり其穴より湖に
込て切らる人夫大勢棒熊手を以追やせり
右の搦を打折るる身さるるやし海中に沈む
件ことの搦ハ人の両手を束つむらるるまじく今以時々
出らる一方の搦より出生にあらる左よりハ抜取
ちんぎと云

○大鳥賊

享保十五年の春江戸神田中崎氏四人を僱へ江の島参詣し江の島の嶽所を大鳥賊を引あけたりと踏まけり。大川て去きとる長き九尺もありあり。斯の巨魚とあり。漁人と前代をたれしあり。江戸へ送る。此魚物と云て。程歴々評曰肉ハ速も持る。至る。以甲あり。を承る。見物なると云あり。

○松喰虫

寛永年中武列川賊の急の私小出行し葉を喰ひて木を枯す。其事おびしく。領分の百姓祈之古伊豆守殿ハ智深く名参の物有り。是を聞給ひ。そのむしをいふ。壺小入壺。一壺の價何なり。云負教を定む。百姓も作て。採む。母種あり。云つ。そり其教百乃壺を土中埋む。り。三年も。壺を掘て。あれ。是。壺中皆松脂有り。世参。是を感。

老松、餘氣結、鳥伏、千年松脂化、鳥琥珀

○石蛤

土佐國田野浦の西に十濱といふ所ありけふの蛤は常
のぶとくみしそ中を砂に昔弘法大師此処を蛤と
見給ひ何れも貝なりと尋給ふは是を蛤ぬ蛤と
言へりけふの蛤を身とくし何と云石を蛤と云
後國帝釈山の替庄原村の山に石貝あり其處あ
すに有けふ海を去り半十七里余と

○阿波國海舟母首貝といふあり弘法大師けふ來
り給ふ浦に疫病あり人民多死たり大師是

を憐て舟を書く海をいふまはハ疫病忽作を
其舟ハ海に入て貝と成是を首貝といふ今あり
天行病の舟といふ云

○眇魚

出羽國多海山の川乃黃瀬魚ハ皆一眼眇目之相傳ふ
漁翁權五郎多海孫三郎と我ハ老の眼を射る者
の矢を放りて又是を射りて北濱をぬきけ川を
まき目をして洗ふは縁母川に眇といふ云り○多海山
の権現ハ多海孫三郎の靈を祀りて高山より常

山頂あり六七月の頃山頂の寺社あり
寺岩窟あり社八幡あり

○斤目魚

振津國川を都昆陽池の鯉鮒其外少魚之於斤目之
は池の魚を祭て行波明神とて相傳ふむ行基上
人一男病て山に倒れし仗りて其病ひ有馬の温泉に
誘引とありし氣力乏し身休叶はれ進む事あり
其後昔飲食を断れりあり氣力乏しハ鮮魚を以て飲食
をせしめ給へ時上人長例の漬物至り魚を得て是

を烹てあふ先試せ上人召しつ別食して甚其美
有りとしきき進む又曰昔も玉瘍ありて是を患ふ上
人瘡瘍を患ハ痛さるべき其體焦爛て甚臭く近所
へきこせあり上人いよやとて其事と忽其像
全身と成某師如來と現れ于時佛告ていそ昔ハ
温泉山あり上人を欲んが今病体と現れと言
てて是れとて件の魚の残餘を昆陽池に放つ化
て一目の魚と成と云

○玉島川鮎

肥前國松浦郡 浮島と玉島川の間に一里をりて松浦
あり神功皇后異國退治の時此而釣を垂終りし
今度獲利と得るは魚餅を食すこと既に
あつて子の魚を得終り皇后曰希見ぬこと其
而も梅豆羅と云ふ今松浦の幸に其王座の今者
は此の幸に年魚多ありて女釣を此ハ多く得る
男釣を此ハ多く得る

○宮川年魚

常列山田宮川の鮎を年々五月昔も二尾とりて松浦の

紫山(ま)をいひて心脚柱(こ)をいひて去(こ)年(こ)供(こ)
うをいひて五月禁裏(ま)へ納(こ)る(こ)ことありあま(こ)け(こ)が(こ)
と云り世々端午(こ)か(こ)と餅(こ)をいひて(こ)は(こ)祭(こ)りの(こ)ま(こ)
ありと云り六月朔日米室(こ)の水(こ)と云り米餅(こ)をいひて(こ)

⑩器用部

○大峰鐘

一日遠江國長福寺(こ)の人乃山(こ)伏来(こ)て存料(こ)を乞(こ)
愚僧(こ)此度(こ)大峯(こ)小入(こ)に(こ)路(こ)用(こ)つ(こ)る(こ)合(こ)力(こ)を(こ)得(こ)ん
と云(こ)母(こ)住(こ)僧(こ)歎(こ)息(こ)と云(こ)孝(こ)女(こ)寺(こ)小(こ)金(こ)と云(こ)六(こ)段(こ)樓(こ)

より外ありあの鐘をそとて踏用せしむる事
へし客僧よりまひつゝを得んとて金剛杖を以
龍頭を突ハ鐘と別地を多うりからけりて
走り行人を相とらまひこれ鐘を追ふ龍が如く
あつて去りぬは鐘大峯釈迦嶽の杉木かりて
今も存は是を鐘掛と云ふ所嶮岨よりて一身
を登りてて手所也

其鐘銘曰 遠江國佐野郡原田庄長福寺天曆六
年六月二日

○三井鐘

文保二年三井寺回禄の時鐘を巖山に棄て撞と
つてを唱へ強くあまを撞てその声三井寺へ
傳ふんといふがごとく一旅徒怒て無動寺の上より落
し棄りし破破毎夜小蛇来つて尾を以て其鐘
たたく別其破愈て故の如く 太平記見

○昔ハ破乃間女扇の要の了入りて古免の云
寛文のまらりてハ其葉の透ありとて今其鑿
鑿をくりたり

○須磨寺鐘

一幸抄列須磨寺（まろりけくふ）竹宝敷盛の鐘青
葉乃笛若木の桜の禁制ハ弁慶の筆を以残り
叡寺鐘樓の鐘を以てちいさく銘ハ安親寺と
あり須磨寺の奉乃寺号なるやと存（ふまろ）ハ
三里をり山奥の寺に壽永の乱ハ武飛坊ある
のまをとりて陣（ま）鐘（かね）ゆけりしを今も寺不
し中りし云

手ころろりゆるぬ草やつともの比涼

次（つぎ）の破（やぶ）列（れつ）松（しょう）とつとハ浦の松の熱名（あつな）むり
行平都（ゆきへら）へゆりむし時老示の松名跡（なあとせ）をわし枝
紫（むらさき）於（お）の（の）（雲（うん））云

按：此地常ニ西尾路（さいびろ）ありありハ砂地也東へ吹くむらさ

○無間鐘

遠江國佐夜中山街道より三里北ハ光明山あり此
寺の鐘を以撞人ハかき以復徳を以得て又其は
まを以来世ハ無間地獄（むくわんじごく）に墮（お）しむる今土
中（ちゆう）埋（う）むらん（らん）と撞（つ）りありしを以撞（つ）るも貪（おん）慾（よく）の人

ハセめてし不淨を埋くらくしむるは是を以て
妬^{ねた}み^みつ^つる^ると云り也つて金銀を倦^あせ^せて彫^うり^りぬ^ぬ
耽^たる^る者^者ハ神^{しん}仙^{せん}を^を蔑^あり^りて^て五^ご帝^{てい}と^と離^りれ^れ大^{たい}慈^じ益^{やく}
通^とり^りて^て他^たの^の憐^{れん}み^みを^をし^して^て利^り欲^{よく}の^のあ^あみ^み獨^どり^り
と^とい^いひ^ひく^く我^{われ}の^の胸^{むね}の^の境^{さかい}を^を朝^あ夕^{せき}持^もて^て諸^{しよ}行^{ぎやう}と^とつ^つあ^あ
各^{おの}常^{とこ}を^を希^{こぼ}し^しぬ^ぬ慈^じ心^{しん}を^を以^もて^て人^{ひと}を^を寂^{じやく}滅^{めつ}を^をこ^こし^しす^すか^か
ら^ら無^む常^{とこ}の^の境^{さかい}を^をり^り

○東大寺鐘

南都東大寺の鐘ハ聖武帝の御願天平年中ハ

鐘之

長一丈三尺六寸 口徑九尺一寸三分

厚八寸三分 量 四万八千九百貫目

冶工^{いし}椽^{せん}本^{ほん}男^{おとこ}玉^{たま}高^{たか}市^し真^{まこと}因^{いん} 高^{たか}市^し真^{まこと}店^{たね}等^{らう}なり

○方廣寺鐘

京都大佛殿方廣寺の鐘ハ秀頼公建立之

長一丈四尺 口徑九尺二寸

厚九寸

治^ちの^の智^ち恩^{いん}院^{いん}江^え都^と増^ま上^{じやう}寺^じの^の鐘^{かね}是^{こゝ}ハ^ハ大^{たい}和^わ招^{しやう}

提寺の鐘より亞了十善ハ百濟国より渡りて
鐘あり

○建長寺鐘

鐘倉建長寺の鏡ハ岡山大覚禪師の所持之後
觀音乃像ハ似テ新王トモ時頼工を以テ磨
さしむはく免ハ然ハゆるハ一磨を以テ磨
ハく大慈の形相備元亨秋書
未見

鎌倉志ハ云圓鑑一面西末菴ハあり高三寸五分横三寸
あり鏡の面ハ觀音半身の像手ハ圓扇を指ハ

俯頸ハ天冠を戴キ瑤珞を垂ル珠を連ス
縁ハ眼ハ睛を以テ鏡の後ハ水中ハ三日月の
影あり其高半分より上ハ梅の枝あり是等ハ鏡
形ハ鏡の形ハ鼎の形ハて裏ハ環あり下略

○長樂寺鈴

上野國新田長樂寺の付室ハハ乃鐘あり是
を響を時を洪水あり古寺ハ御靈屋あり建
立の初ハ一幸御修復あり見ハて法用を以
む諸職人等古ハ時付室を以テ

其内丹紙如多々之ハ重ふかたけらよのあり解く
凡ハ終有り何心なく事をも悔り唱は小衆僧
奔来りて此終の音を以てハ竜神滅無ありと
かゝる雨をうて洪水を以て制を月晴く空塚を
其後ハ雨をうて西條を以て雷頻ありて洪水せり其
席小南苗狩方粟本雪朝ありあひてまじりあはる
也

孝寺ハ京建仁寺宗西和尚乃才子宗朝和尚の用
基めて禅宗有り今ハ天台宗あり寺ハ百孝之

○鴨毛屏風

南都東大寺の宝物之聖武帝東大寺供粮の時大唐
より進不之大屏風之東大寺より法華寺まで是を
引續く其間十五町あり光明皇后泰禱し終ハ時
左右引と云り寛文六年三月四日より七日まで勅
使有て宝物を以て改く是は之屏風ハ九二
百雙有りありと云

○奇南

文趾圃の深山母朽木有て谷水母流来るを指ひ

取は上品又一本を伐りて数年土を埋むその腐
らふを去りて心を用ひては本日本物の梗つぎと云ふ
似たり通商考

或人の曰交趾國占城國の故百里山奥に里あり天竺
に近し此所の人猿の如くありて交趾占城の商人か
年秋のまろりり敷の限りありて交趾占城の商人か
の山の替に假初の少るをくくし市を立合由氣
を煮てはよかの奥山の人木の根朽木を一脊負つ
持あり一荷を合由氣一四ありて去るに北中上品

下品いんの奇き有あり又二荷ありてはよかあり是幸
不ふ孝こうあり商人の過あやまりて持もち人何の弁べんを
只之ただ金海きんかい氣きをくくぬと云ふはぬのきなり

○蘭奢待 并紅塵

南都東大寺勅符の藏に納する号正念院 始に黄熟香と
ふ聖武帝に蘭奢待と改めしは後には三字に東大寺
の文字隠まり此量三貫三百五十目あり紅塵八貫
四百六十六目ありと云天子御代に交是をきり後
終ふと云

蘭奢待

量

三頁三百五目



此紙四寸

木口周四尺三寸

紅塵

量

四頁六百五目

此紙四寸



九寸分

一尺三寸

元龜三年三月廿八日織田信長公奏と經く先拾みま
々々く寸八分と切しむ勅使し日野大納言資定し御し飛鳥井
大納言雅教し御奉行し佐久間右衛尉管屋し九在唐門し増し九郎し左
唐門し蜂谷兵庫し武井夕庵し松井友閑し法印し以上六人之

慶長七年六月十日に切しる爲しに勅使し觀し修し寺し教し廣し橋
教し柙し原し教し之し奉行しハ本し多し上し野し介し正し純

永樂錢起

永樂錢し日し本し一し後し百し六

永樂大明成宗帝
ノ年号ナリ

後小松院し應し永し十

年八月二日未しの刻しより大風吹して堂社民屋し亦しく倒し
る翌三日己しの刻しより風しより其日申しの刻しより唐船一艘相列
三崎濱し漂しひつゝ其時謙し倉しの將軍足利左兵衛督
滿兼し御下知し有して伊東次郎し在し唐し尉し貞次し梶し系し能し登し守し景
宗三浦備前し守し義高しを奉行しとて檢し校しありしきし不

悪風ふらふ悪風あつせんのよし船中乃雜物ざつぶつ実換じつかん多不唐
洞ほらの永樂跡えいらく救すく万貫まんくわん積つり依よ之の京都前きやうと水軍義すいぐんぎ
満入道まんにちだう有新あたら水軍義すいぐんぎ持公もちこう是こゝを祈いのり唐船たうせん関
東くわんとうへ為岸ゐがしなる上うへハ満兼まんけん佐分さぶんなるなりに
ハ船中せんちゆうの然宝跡ぜんたうは押おし其價あひい品しんを移うつり船ハ
移うつるなりに其後そのち若干そくごの永樂跡えいらく後ち水幣すゐへいなる
其法そのはを定さめ關東くわんとう水相すゐさうを是こゝを因より通とう年ねんを種しゆ
て天文てんぶんの頃ころ水樂すゐがく浅水せんすゐ瀬せより悪あつせん跡あとなるなりに
日ひと悪あつせん跡あとなるなりに賣買うばいの業わざ市所いちじよを

かの悪跡あつせんを論ろんし撰せんて關靜くわんじやう止とりたるなりに咳せき然ぜんふ
天正てんしやうのころ北条きたうじやう氏康うぢやう關八列くわんぱつれつを志しするなりに諸士しよし未ま志し
下知げち水幣すゐへいひりれハ氏康うぢやうの云いふに月つきハ島しまへあき共
水幣すゐへいめを志しするなりに自今こゝろ關東くわんとう水幣すゐへいなるなりに水樂すゐがくと水幣すゐへい
の跡あとと水幣すゐへいなるなりに一いつハ浅せんの音ね悪あつせん日ひなるなりに
て後ちへハ水幣すゐへいハ二ふたハ氏うぢの關靜くわんじやうを志しするなりに三さんハ賣買うばいの
跡あとを弊へいするなりに免めんなりと云いふ家臣けあしん山角やまかく信しん法はふ方はう定ぢやう
信しん笠かさ系けい越えつ前まへ守しゆ康かう子こ作しやくるなりに庄郷しやうきやう村里むらの丈たけハ右
の証しやうを著しやくして高札かうさつを立たてるなりに自然しぜんと種しゆハ廢はい

ア上ゴゴへのき方にて永樂をより候東みよりきる
此時より証と京銭とを以て其後慶長九年
御代もよく天下一統也永樂銭を以てしる
証銭一而も弁ずしあはれとて永樂一銭のかりふ
びし四銭をいふはむぬ作らざるにけりその後又
高夫の証儀も及ぶなり聞て身は慶長十一年
十二月八日永樂をん市停止せしめ作られ江戸本橋
も高札をきりしりて○永一貫文を金一両と立二言
キ文金を度と立てそのころ今もかり時八百銭の

内一銭はし除きて口銭は今以所て永納の年
貞ホありけ遺凡之種百銭也是をいふ一永一銭
の價を除きて九十六銭を以て通用と云り

諸國里人談終

水田源之助

安政五年午夏六月

一册藏

山本氏一画之

里人談五終
大尾

